

令和8年度入学 社会福祉学部 編入学（推薦）試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	荻谷 剛彦	知的複眼思考法	1996年 pp.126-137 より 一部改変	講談社

令和8年度 編入学（推薦）

社会福祉学部

小 論 文 (120分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は、2 ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
3. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
5. 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
6. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
7. 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
8. 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 50 点)

「なぜ」という問いがさらなる考えを誘発するのは、その答え、「なぜなら……」についての予想や見込みを、とりあえず考えてみることに意味があるからです。もちろん、この「なぜ」に対して、「なぜなら……」という見込みがどれだけ正しいのか、最終的には調べてみて確かめることが必要です。しかし、その前にその答えについて、自分なりの想像をはたらかせてみることに、つまり、原因を探ってみることは、「どうなっているのか」を問題とする場合以上に、深く考えることにつながっていく可能性があるのです。少し難しいことばを使えば、このような予測は、因果関係(原因と結果のつながり)についての仮説(見込みや予想)を立てることにほかなりません。

たとえば、「中学生の塾通いはどうなっているのか」という問いは、「どうなっている」のところを、時間や費用、頻度といった部分に分けて、問いのブレイクダウンをしてみても、結局はそれぞれについて調べなければ、いくら勝手な想像をはたかせたところで、そうした予想に基づく議論はあまり意味をもちません。それに対し、「なぜ中学生の塾通いは増えているのか」という「なぜ」という問いの場合には、その理由や原因を予想すること自体、私たちの考えを深めるきっかけとなります。想像力を駆使して、「なぜ」の答えを考えたり、仲間と議論することは、解答にさまざまな可能性があるだけに、「どうなっているのか」を勝手に予測する場合以上に、考える力をはたらかせることになるのです。

もちろん、この場合にも、「なぜなら、受験競争が激しくなったからだ」といった、ありきたりの解答を与えて満足してしまうのであれば、考えを深めることにはつながらないでしょう。「常識」の罠にまんまとはまって、思考停止に陥ってしまうからです。それでは、複眼思考につながりません。

そこで、この「なぜ」を上手に展開していくことが、新しい問いの発見につながっていくのです。「なぜ、中学生の塾通いは増えているのか」を出発点に、さまざまな「なぜ」の連鎖を発見していく。そうすることで、最初の問題にいろいろな角度から、アプローチしていくことが可能になります。

(中 略)

「なぜ」という問いが重要なのは、問いの展開を可能にするからというだけではありません。それに加えて、原因と結果の関係、すなわち、因果関係を問うのが、「なぜ」という問いであるという点が、複眼思考にとって重要だからです。

因果関係というと難しく感じるかもしれませんが、しかし、何ごとにも原因と結果とがあるというように考えれば、その原因を探ろうという試みは、因果を問うということになります。

(中 略)

ところで、部屋の明かりが消えたという場合には、たいていは原因が一つでしょう。また、「原因は何かについて考える」といっても、せいぜいあたりを見渡せば見当がつくという程度のことであり、とりたてて深く考える必要はありません。

しかし、私たちを取り巻いているさまざまな出来事の中には、その原因が一つとは限らないものや、何が本当の原因か、簡単には見分けにくいことがたくさんあります。

ビジネスの世界での「どうしたらよいか」という問いにしても、ひとつの原因＝手段だけで、期待している結果＝目的が達成できるとは限りません。複数の原因が絡まりあって、ひとつの結果を生み出したり、あるいは逆に、ひとつの原因からさまざまな結果が生まれるということが少なくないのです。

とくに、社会的な問題については、複数の原因が錯綜して関係していて、複雑な場合のほうが多いといえます。この場合、原因ひとつと結果ひとつの対応を考える場合とは異なり、複数の原因を考慮に入れなければならないこととなります。そして、そのときに気をつけなければならないのが、偽の原因に惑わされないということなのです。

(中 略)

通塾率の例で考えてみましょう。ある人が、受験に熱心な親がより多く住んでいる都会のほうが、中学生の通塾率が高い事実を示して、「受験競争がさらにきびしくなったから通塾率も上がったという証拠はこれだ」といったとします。なるほど、受験熱心な親がたくさん住んでいる地域なら、結果的に受験競争がより激しくなる、だから、そうした地域で通塾率が高くなるという事実は、「受験競争がさらにきびしくなったからだ」という解答が正しいことの証拠であるようにみえます。

しかし、これに対して、都会ほど、塾に子どもを通わせることのできる裕福な家庭も多いから、通塾率も高いのだ、という説明だって可能です。この場合、教育熱心な家庭が多いことが原因だという見方に対して、それは見かけ上の原因である可能性を提示しています。もしも、家庭の経済状態のほうがより重要な原因だとすれば、先の説明では原因と見なされていた「家族の教育熱心さ」の影響は、見せかけのものだけということになります。

(荻谷剛彦『知的複眼思考法』、講談社、1996年、pp.126-137より、一部改変)

問1 下線部「複眼思考」には、なぜ意味があるのか。中学生の塾通いの例を用いて、本文の内容に即して、200字以上300字以内で説明しなさい。

問2 下記の内容について、この結論の因果関係をどう考えるか。複眼思考であなたの考えを、600字以上800字以内で述べなさい。

ある老人クラブの高齢者に対して4週にわたって、防犯的行動を促進させる意図で防犯講座を受講させた。その結果多くの高齢者が望ましい水準の防犯的行動を示した。これによって、講座の効果が示されたと結論づけた。